

20. 各領域の活動

<家族看護学領域>

1) ケア検討会

(1) 第1回

【テーマ】 渡辺式家族アセスメントモデルを用いた家族看護の展開

【日時】 平成30年10月20日（土） 13:00～15:30

【場所】 高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C313

【参加者】 地域の看護職の方2名，修了生1名，大学院生5名，教員3名

【内容】

はじめに、渡辺式家族アセスメントモデル開発の経緯やモデルの理論的基盤・前提、全体像についての講義と、モデルを活用する際に使用する「困った場面課題解決シート」の特徴や活用方法を学習した。アセスメントから見出される「援助者と家族の関係性10パターン」が示されており、実際の臨床場面を想像しながら、1つ1つのパターンについて理解を深めた。

そして次に、模擬事例を用いてグループで事例展開を行った。事例は、夫との死別後知的障がいのある弟と暮らす高齢女性の家族の事例である。自宅での転倒で骨折し入院したAさんは弟のことを心配し退院を望むものの、子どもたちの面会が少なく、弟のことも考えると、受け持ち看護師はAさんの今後の療養場所の決定に困り、また看護チームでは子どもたちへの陰性感情が表出されるようになっていた。

グループワークでは、2グループに分かれ、各グループで分析対象となる家族員とそれに影響する家族員を決定し、看護師や分析対象者それぞれが感じている困り事、行っている対処、その背景について、事例を読み込みながらディスカッションを行った。そしてそれがどのように相互作用し、どんなパワーバランスになっているのか、どんな関係性パターンなのかについて、モデルに沿ってアセスメントを展開し援助の方向性を検討した。実際に活用すると、複数の家族員の誰を分析対象者とするかで、家族に生じている現象や分析対象者とした家族員と援助者との間で起きている現象に違いが出るため、援助者自身が誰との間で起きている現象を理解したいのか、また何を知りたいのかを考えながら、分析対象者を決定する必要があることを学んだ。そして、分析対象者の皮膚の内側に入るようにしながらその人のことを想像し、自分がいかに現象を理解し変化していくかが、家族支援のポイントであることを共有した。

(2) 第2回

【テーマ】 家族看護エンパワーメントモデルを用いた家族看護の展開

【日時】 平成31年1月12日（土） 13:00～16:00

【場所】 高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C313

【参加者】 修了生2名，大学院生1名，教員4名

【内容】

第2回は、夫婦で生活してきた壮年期のがん患者が終末期を迎え、痛みのコントロールができていないことに対して怒りを表出する妻への関わりに医療者が苦慮している事例を取り上げ、検討した。家族看護学領域の修了生2名の参加があり、家族支援専門看護師としてどのように展開するかという視点をもって、参加者全員でディスカッションした。

まず、患者とその家族の理解を深めるために、家族の病気体験の理解と家族アセスメントについて自由に意見を出し合い、家族像を形成した。すると、急な病気の発症にも、二人で歩むというこれまでの夫婦のあり方を大切にして、病気に立ち向かってきた家族であり、病気の進行と治療や症状のコントロールの難しさが生じるなかで、これまで大切にしてきたこ

とを続けようとする中で、患者を守ろうとする妻の感情表出が医療者にとって脅かしとなり、医療者と家族に軋轢が生じて、互いに困っている状況にあると考えられた。また、家族が大事にしたいことと医療者が家族に対して大事にしたいことにずれが生じていることが見えてきた。

この家族像をもとに、家族や医療者への支援について検討した。まずは、医療者が専門性を発揮して積極的に患者に働きかけ、苦痛な症状のコントロールをしっかりと行うことや、妻の感情の表出を促し、一人で頑張らなくて良いことを伝えて、医療者と共に治療や今後のことを考えていく形をつくる必要があると考えられた。また、医療者に対しては、妻の病気体験を理解できるように働きかけることや、親身になって妻を支えようとしている受け持ち看護師と患者家族のパワーに押されそうになっている医師が疲弊しないようにサポートすることが重要であるという意見が出た。ディスカッションを通して、まずは家族を理解するための家族アセスメントが大事であること、誰に働きかければ状況が変化するかを熟考しながら、方略を練って効果的に働くところから入っていくことが大切であることを再認識する機会となった。

<精神看護学領域>

1) 看護相談室（ケア検討会）

平成30年度は、3回の看護相談室を開催した。本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を実施した。

(1) 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ① 開催日時：平成30年6月21日(木) 19:00-21:00
- ② 場所：高知県立大学看護学部棟 C313
- ③ 参加人数：7名（本学大学院生2名、本学大学院修了生2名、他大学大学院修了生1名、教員2名）
- ④ 内容：1名の参加者より、自殺念慮のある思春期の発達障害患者への介入について事例検討した。自殺念慮が持続しているものの、今すぐに行動することはなく、病棟看護師が関わりの難しさを感じていた状況に対し、CNSはこれまでの生育歴から、感情表出を促すことが、自殺行動の抑制つながらとアセスメントし、定期的な面接を行った。意見交換では、CNSの事例の捉え方や介入の仕方などを、受け持ち看護師や他のスタッフと共有することによって、事例にとっての安全や適切な関わりについて理解を深めることができるなどの意見が挙げられた。CNSの実践から、自殺念慮や自殺のリスクがある事例への看護の質を高めることにつなげる重要性について学びを得る機会となった。

(2) 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ① 開催日時：平成30年9月20日(木) 19:00-21:00
- ② 場所：高知県立大学看護学部棟 C313
- ③ 参加人数：10名（本学大学院生2名、本学大学院修了生3名、他大学大学院修了生2名、教員3名）
- ④ 内容：自宅近くの病院に診療拒否をされ、退院困難となっている双極性障害の事例を検討した。躁状態になっても透析には必ず来院することから、身体機能で困っており、病院に通うということは本人の支えとなっているのではないかと、実は寂しさや人とのつながりを求めているのではないかという意見が出た。訪問看護導入をなぜ拒否しているのか、本人の思いを理解するために、まずは自宅に訪問し、患者の在宅生活を知ることの重要性が話し合われた。

(3) 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ① 開催日時：平成30年12月20日(木) 19:00-21:00
- ② 場所：高知県立大学看護学部棟 C313
- ③ 参加人数：6名（本学修了生2名 本学大学院生1名 教員3名）
- ④ 内容：血液疾患で一般病棟に入院中の統合失調感情障害を有する患者が、興奮状態になったことで、看護師や他職種の困難感が続いている事例を検討した。精神症状を悪化させる要因として、薬物調整による抗精神病薬の中止や、興奮状態の前兆について意見があった。また、治療薬による搔痒感に対して、保清などのセルフケアを実施することや、今後は他職種と情報共有し、患者の理解を促し課題を明確にすることが、治療環境を整えることにつながるといった提案があり、「その時、今まさにの対応」と「長期的な対応」の2つの支え方が必要であるという学びを得る機会となった。

2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

- (1) 開催日時：平成 30 年 6 月 23 日(土) 19:00～21:00
- (2) 場所：東京都内
- (3) 参加人数：17 名（卒業生 3 名、修了生 4 名、前教員 2 名、大学院生 2 名、教員 6 名）
- (4) 内容：日本精神保健看護学会第 28 回学術集会にあわせ、交流会を開催した。卒後 1 年目からベテランまで幅広い層の方に参加していただき、楽しい交流ができる貴重な機会となった。

3) リカレント教育

(1) 高知県西部地区研修会（本学健康長寿センター・日精看共催事業）

- ① 開催日時：平成 30 年 6 月 9 日(土) 13:30～16:00
- ② 参加人数：一般参加者 61 名（看護師、准看護師 34 名・介護福祉士・看護補助者など 27 名）、日精看役員 6 名、本学教員 2 名、大学院生 2 名。
- ③ 場所：聖ヶ丘病院(宿毛市)
- ④ 内容：この事業は、高知県西部地区の精神科医療従事者への教育機会の提供を目的として毎年実施している。今年度は、「認知症の人の視点に立ってケアを考える」というタイトルで開催し、多くの参加者を得た。はじめに、〈認知症の人の視点に立つとは〉〈認知症について〉〈認知症で使用される薬について〉〈認知症の人が経験していることを理解する〉の講義を教員と大学院生で行った。その後「認知症そのところの世界」の DVD を視聴し、認知症の人の体験を捉えるシートを用いて個人ワークを実施した。研修後半は、アルツハイマー型認知症の 2 事例について、認知症をもつ人がどのように感じているのか、それを踏まえてどのようなケアが必要なのかについてグループワークで考えてもらった。

ディスカッションした内容は、いくつかのグループに発表していただき、全体で共有した。

4) その他の活動（精神科病院におけるボランティア活動）

(1) 芸西病院「みずき祭」のお手伝い

- ① 開催日：平成 30 年 5 月 20 日（日）9：00～14：00
- ② 参加者：16 名（看護学部 2 回生 14 名、精神看護学領域教員 2 名）
- ③ 内容：入院患者や、併設する施設の利用者の誘導、屋台の販売とお手伝い、ハンドマッサージなどを学生が担当した。「耳が聞こえにくい方とコミュニケーションを取るときに、学校で学んだことを使えた。」「この人がお花を好きなんだということがわかったり、一緒にカラオケで手をたたいたりして、楽しく過ごせてよかった。」といった感想があった。これまで学習したことを思い出して、交流の仕方を工夫するなど、多くの患者や利用者、職員とふれあうことで、学生それぞれが気づきや学びを得ることができた。

(2) 海辺の杜ホスピタル「精華祭」のお手伝い

- ① 開催日：平成 30 年 10 月 11 日（土）13：00～15：00
- ② 参加者：7 名（看護学部 1 回生 1 名、看護学部 3 回生 6 名）
- ③ 内容：入院患者の誘導を学生が担当し、精華祭を共に楽しんだ。メイン会場には参加できない入院患者とも会話をしたり、屋台の食べ物を提供するなど、入院生活における楽しみの時間を一緒に過ごした。

<がん看護学領域>

1) ケア検討会

看護相談室の事業の一環として、地域の看護者とがん看護学領域の大学院生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護勘後実践を検討する会」を開催している。平成30年度は「がん患者の在宅療養を支える多職種連携と看護」をテーマに、各回サブテーマを決めて開催した。ケア検討会では、①事例紹介、②ディスカッションポイントに沿った小グループでのグループディスカッション、③各グループで検討事項についての全体発表、④活用できる知識と事例をつなげた解説、⑤事例のテーマに沿った資料や文献の配布を行っている。また、検討会終了後は、日頃のがん看護実践に関する情報交換が行われ、参加者のネットワークを育む場として活用されている。今年度は、テーマや参加者に応じて、事例検討だけでなく、グループワークや全体討議を主体としたケア検討会を企画し、実施した。

【第1回】がん患者の在宅移行支援における困難事例

日時：平成30年6月23日（土）13:00～15:00

場所：高知県立大学池キャンパス共用棟2階講義室 D220

参加者：25名（看護職者20名、大学院生1名、教員4名）

内容：第1回は、立場が異なる参加者の「がん患者の在宅移行支援における困難」の多様性を考え、個々の体験をもとにグループディスカッションを行った。初めに、がん患者の在宅移行支援における困難と困難の背景にある課題を話し合い、次にグループで一つの課題に焦点を当て、在宅移行支援について話し合いを行った。病院と在宅側との情報共有、療養場所に関する医療者間の意見の相違、未告知の患者さんの在宅移行支援について、それぞれグループ発表と全体共有を行った。参加者は、患者、家族、医療者それぞれの意向や思いを大切に、カンファレンスを通じて多職種間で情報を共有しながら、同じ目標に向かい在宅移行支援に取り組む必要について、再認識することができた。

【第2回】外来でのがん患者の療養支援における困難事例

日時：平成30年9月29日（土）13:00～15:00

場所：高知県立大学池キャンパス共用棟2階講義室 D220

参加者：17名（看護職者8名、大学院生6名、教員3名）

内容：第2回は、がんの進行と有害事象による苦痛の増大により、医師から薬物療法の中止を提示されたが、継続を強く望む独居の高齢がん患者の事例をもとに、患者の体験理解を踏まえ、意思決定支援や療養支援についてグループディスカッションを行った。患者の病気や治療の認識を把握し、家族の病状説明の程度やキーパーソンの有無、これからの過ごし方への希望や生活上の困りごとなどを確認する必要性、これまで全て自分で決定してきた患者の意思決定のスタイルを尊重し、医療者が患者の意思を最大限に尊重する姿勢を保つ必要性などの意見が出され、参加者が日々のがん患者の意思決定や療養移行の支援でアドバンス・ケア・プランニング（以下、ACP）を実践していることが分かった。病院・在宅・施設等それぞれの場でACPを実践して軌跡を確実につなぎ、地域全体で患者にとっての最善の医療・ケアの提供を目指す大切さを認識することができた。

【第3回】がん患者の在宅移行支援における困難事例

日時：平成31年1月26日（土）13:00～15:00

場所：高知県立大学池キャンパス共用棟2階講義室 D220

参加者：13名（看護職者7名、大学院生3名、教員3名）

内容：第3回は、参加者それぞれの立場や施設におけるがん患者の在宅療養支援についての実際や困難事例を共有し、対応策を一緒に考える機会とした。まず、在宅でのがん患者の療養支援について、多職種連携の必要性、困難や課題、看看連携などに関するミニレクチャーを行い、続いて、個人や施設ごとに、在宅でのがん患者の療養支援における多職種連携の困難事例をまとめ、発表を行った。参加者が抱える困難に共通する「多職種との情報共有」について全体ディスカッションを行い、各組織での取り組みを共有することで、病棟看護師が地域の専門職との関係を築くことや地域に出ていくことの重要性を再認識することができた。そして、「家に帰ること」と「最期を家で迎えること」を別々に考える必要性や在宅療養に不安を抱える家族に対して訪問看護師がかかわる意味、看護師が医師との橋渡し役を担い連携を支援していくことの重要性を共有した。

アンケート結果から、参加者全員が本年度の検討会について「満足」と評価しており、他施設における関わりの実際や取り組みを共有することで自己の看護実践や自施設を振り返る機会になり、他の場所で活動する看護専門職の意見を聞くことが学びにつながっていることが分かった。また、参加者全員が、看護実践に活用できる学びを得ることができたと評価しており、看護の方向性の確認や日々の看護実践への自信やモチベーションが高められていることが分かった。これらのことから、参加者のニーズを満たし、看護実践に有用な学びが得られるケア検討会であったと評価できる。ケア検討会に期待することとして、「新たな知識や援助技術を獲得したい」、「困難な事例の介入方法の手がかりを得たい」、「日頃の看護実践における困りごとや課題について、看護職の方と自由に意見交換がしたい」、「講義を通して具体的な看護援助方法を知りたい」という意見が多くあげられていた。これらを踏まえ次年度も、がん看護を実践している看護職のニーズに沿う企画・運営を検討していく。

2) 卒業生との交流会およびリカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラル』を発足し、活動を行っている。アストラルは、①学習会の開催、②メンターシップ、③メーリングリスト等による情報共有、④学会参加、⑤研究、⑥ホームページ・アストラルのブログ作成という7つの活動を通じて、アストラルの繋がり強化と発展を目指している。本年度は、プレCNSや経験年数が浅いCNSの自己研鑽の場になるように、4回の事例検討会の開催に取り組んだ。

【第1回】事例検討会

テーマ：進行がんで入院した患者・家族の意思決定支援に悩んだ事例

日時：平成30年5月25日（金）19:00～20:00

参加者：15名（修了生13名、教員2名）

事例提供：高知県・高知市病院企業団立 高知医療センター
がん看護専門看護師 高橋 志保 氏

【第2回】事例検討会

テーマ：急激な病状の変化を受け止められない家族への関わり

日 時：平成 30 年 7 月 27 日（金）19:00～20:00

参加者：10 名（修了生 9 名、教員 1 名）

事例提供：高知県・高知市病院企業団立 高知医療センター 野瀬 智代 氏

【第 3 回】事例検討会

テーマ：最期まで痛みを強く訴え症状緩和が困難であった事例

日 時：平成 30 年 9 月 28 日（金）19:00～20:00

事例提供：高知大学医学部附属病院 がん看護専門看護師 岡田 明子 氏

参加者：11 名（修了生 10 名、教員 1 名）

【第 4 回】事例検討会

テーマ：気管切開の施行に迷う高齢がん患者への意思決定支援

日 時：平成 31 年 1 月 25 日（金）18:30～20:30

事例提供：香川労災病院 がん看護専門看護師 岩田 尚子 氏

参加者：7 名（修了生 6 名、教員 1 名）

【第 5 回】本年度アストラルの活動のまとめと次年度の計画

日 時：平成 31 年 3 月 8 日（金）19:00～20:00

参加者：8 名（修了生 6 名、教員 2 名）

3) がん看護学領域特別講義

がん看護学領域では、大学院生や修了生を対象とした特別講義を継続して開催している。特別講義では、修了生が後輩である大学院生や修了生に対して、修了後の役割開発のプロセスや日頃の OCNS としての実践活動について語る機会を提供している。

テーマ：がん高度実践看護師の活動の実際と今後の展望

日 時：平成 30 年 12 月 8 日（土）13:00～15:00

場 所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟 C220 講義室

講 師：倉敷中央病院 がん看護専門看護師 平田 佳子 氏

参加者：13 名（大学院生 9 名、修了生 2 名、教員 2 名）

内 容：専門看護師は活動の目的を明確にし、目的のためにどのような取り組みが必要かをアセスメントし、具体的な計画と戦略的な方法を用いて組織内に浸透させていくという一連のプロセスを学ぶことができた。また、専門看護師が change agent としての役割を果たし自らの役割を拡大していくためには、組織分析力や企画力を高め、能動的に活動していくことの重要性を理解することができた。がんプロ学生は、活躍している先輩の話や先輩の話を聞く事で、がん高度実践看護師を目指す意欲を高め、そのための自己の課題を考える機会になった。

4) NPO 法人緩和ケア協会 第 17 回研究発表会

がん看護学領域では、毎年開催している NPO 法人緩和ケア協会研究発表会の企画・運営を行っている。今年度の第 17 回研究発表会では、看護職だけでなく医師やソーシャルワーカーなど多職種との協働による各部署での活動や研究的な取り組みが発表された。

日 時：平成 30 年 5 月 20 日（日）9:30～11:15

場 所：高知県・高知市病院企業団立高知医療センターくろしおホール

参加者：69 名

演題数：8 演題

<慢性期看護学領域>

1) 社会貢献活動について

(1) ケア検討会（看護相談室）

テーマ：「症状増悪と合併症拡大により生活機能が低下した患者への退院支援」

発表者：高知大学医学部附属病院 看護師 楠瀬 留巳 氏

日時：平成 30 年 12 月 14 日(金) 18:30~20:00

場所：共用棟 D220 会議室 参加者：8 名、教員 4 名

難病による症状増悪と合併症の併発で入退院を繰り返し、さらに入院期間が長期化する患者に担当看護師として関わった事例を紹介していただき、参加者と共に意見交換を行った。参加者は特定機能病院や地域包括ケア病棟、在宅看護に関わっている看護師など多領域にわたり、いろいろな立場の視点から患者の思いや今後の生活、患者にとっての入院の意味などを捉えることができた。また、日頃からあまり思いを口にされない患者に関わるなかで患者の思いに寄り添っているだろうかという課題について参加者とディスカッションを行った。患者には多くの専門職者が関わっており、多職種で情報を共有する、巻き込むことで思いを表出しない患者の理解が深まり、より患者の思いに寄り添った退院支援につながるのではないかと、などの意見がだされた。

ケア検討会後のアンケートでは、「いろいろな話や意見を聞き視点が変わり、視野が広がった。関わりが難しかったり、悩んだり日々しているが、実践した看護を振り返ることがよい学習に機会となった」、「慢性疾患は在宅で生活する視点をもって関わりと念頭においていたつもりだが、実際在宅で関わっている看護師の意見を聞くことで、やはり入院中の患者の姿しか見えていなかったことに気づくことができた。病棟・外来・多職種・リソースナース・医師と情報を共有していくことの大切さも考えることができた」などの感想をいただいた。

ケア検討会を通して、日々の看護実践を振り返り、多領域の看護師と意見交換することで視野が広がり、今後の看護ケアへと繋がる機会となったと思われる。

(2) 慢性看護学領域リカレント教育（パネルディスカッション）

テーマ：「高知県における血管病の重症化予防 地域・診療所・病院の看看連携」

パネリスト：高知県健康長寿政策課、高知市、安芸市、全国健康保険協会（協会けんぽ）

高知支部の保健師 4 名、高須病院 CKD 外来の看護師 1 名、当領域教員 3 名 計 8 名

日時：平成 30 年 8 月 4 日(土) 13:30~16:30

場所：共用棟 D220 会議室

対象：高知県の血管病重症化予防に従事する看護職者 参加者：22 名

本活動は、血管病重症化予防への医療機関の現状の取組みを問い直し、地域完結型医療に向けての課題を共有するための相互研修を目的に実施した。昨年度からの取り組みである高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト「高知県の血管病ハイリスク群への重症化予防推進モデルの開発－慢性疾患看護専門看護師による病院と地域の看看連携を中心に－」の経過報告、及び次段階の「高知県における血管病の重症化予防 地域・診療所・病院の看看連携」について現状の課題を共有し意見交換を行った。

第 1 部のパネリスト 5 名の発表は、「高知県の血管病ハイリスク群への重症化予防推進モデルの開発に向けて」「国及び県における糖尿病性腎症重症化予防の取り組みと課題」「高知市国保における糖尿病性腎症重症化予防の現状と課題」「高知県の中小企業就労者における血管病重症化予防の現状と課題」「CKD 外来における血管病重症化予防の現状と課題」のテーマで行われた。

第2部のパネリスト3名の発表は、「安芸市における血管病重症化予防事業の展開と成果」「他県における地域・診療所・病院の看看連携—事例紹介—」「慢性疾患看護専門看護師による病院と地域・診療所の看看連携に向けて」のテーマで行われた。

全体ディスカッションでは、参加者の地域・施設で抱える重症化予防の課題について、「連携は必要だと思うが時間やマンパワーの不足でなかなか実現しない」「予防は大事だが診療報酬などがつかない、組織の中での優先度として低く捉えられ現実難しい」などの意見があり、どの地域・施設でも血管病の重症化予防に対する課題を抱えていることが伺えた。参加者からは「これまで全く知る機会がなかった地域の取り組みがよくわかった」「国の状況や患者さんの背景などデータとして知ることができ、今後の看護に活用できる」「病院と地域、病棟と外来の連携について困ることが多かったが、他施設での取り組みを知り参考になった」といった感想をいただいた。

本パネルディスカッションを通して、行政、地域、医療施設それぞれの活動を互いに理解でき、血管病の重症化予防には看護師・保健師が地域・セクターを越えてつながることの必要を互いに確認しあえ、一定の成果が得られたと考える。

(3) 慢性看護学領域リカレント教育（特別公開講座）

テーマ：「高知県民の血管病重症化予防を地域連携で推進しよう—佐賀県のコーディネート看護師を活用した『ストップ糖尿病』対策に学ぶ地域連携の方策」

講師：佐賀大学医学部教授2名、佐賀県健康福祉部1名、小城市民病院糖尿病コーディネート看護師1名、高知県健康長寿政策課1名、当領域教員1名 計6名

共催：高知県、高知県立大学健康長寿センター

後援：高知県看護協会、高知県糖尿病療養指導士会

日時：平成30年9月16日(日) 13:30～17:00

場所：大講義室

対象：高知県の血管病重症化予防に従事する医療職者 参加者88名

本特別公開講座は先駆的かつ独自の地域連携システムを開発・運用している佐賀大学と佐賀県の取組に学び高知県の地域連携システムへの適用可能性を検討することを目的に開催した。

佐賀県の地域連携システムは、佐賀大学が糖尿病コーディネート看護師を育成することで、県内の各地域で保健師と看護師の協働・連携を円滑にし、かつ地域基幹病院とかかりつけ医における糖尿病患者の療養移行を継続的に支援するものである。

第1部講義の前半は「高知県における血管病の現状」「高知県の血管病重症化予防に向けた看看連携」、後半は「佐賀県における糖尿病コーディネート看護師の育成と支援」「佐賀県における『ストップ糖尿病』対策事業の取り組み」のテーマで行われた。

第2部の講義は、「糖尿病コーディネート看護師としての活動の実際」「糖尿病性腎症重症化予防対策 アウトプットからアウトカムを目指して」のテーマで行われた。

講師、参加者との意見交換では、「糖尿病コーディネート看護師の運用資金はどのように確保しているのか」、「糖尿病コーディネート看護師が実際に活動するために病院内外ではどのようなサポート体制となっているのか」、「異なる機関の多職種が連携する上で患者さんの個人情報をどのように共有しているのか」などの質問があり、佐賀県の取り組みへの関心の高さが伺われた。

また、「重症化予防や地域連携の必要性を実感した」、「行政、大学、臨床が一体となった取り組みがすごいと思った」、「コーディネート看護師の熱意や行動力、多職種を巻き込む看護のわざ、サポート体制や連携など重症化を予防するための力や内容がわかった」、「戦略を練るためには糖尿病専門医の医学的アセスメントが軸にあることがわかった。そこを可視化し、

課題を共有していくことがまず必要であり、効果的な展開に繋がると思いました」などの感想・意見が寄せられた。

さらに、佐賀県の取り組みに刺激をうけ、「各専門職が抱えている課題を共有しながら、連携して血管病重症化予防に取り組んでいくことが高知県でも必要だと思いました」、「高知県にも佐賀県のような地域と病院をつなぐコーディネーター看護師をつくってほしい」と高知県での取り組みとしての意見もいただいた。

本特別公開講座を通じて、血管病重症化予防に関する高知県の現状と医療資源の課題を再確認し、地域の保健医療ヒューマンリソースの開発の必要性と文書を主とした地域連携からヒューマンネットワークへの質的転換について議論を始める機会を提供することができ、一定の成果が得られたと考える。

2) 研究活動について

平成 29～30 年度高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト「高知県の血管病ハイリスク群への重症化予防推進モデルの開発ー慢性疾患看護専門看護師による病院と地域の看看連携を中心にー」（研究代表者：内田雅子）の研究活動を実施した。

平成 30 年度の活動は、次のとおりである。

* 研究の全様は、「戦略的研究プロジェクト推進費による活動」に記載。

(1) 高知県内における血管病の重症化のプロセスの事例分析

研究協力者は、メタボリック症候群や糖尿病などの生活習慣病の重症化により透析導入に至った男女 5 名、血管病重症化プロセスの看護経験を有する保健師 5 名、看護師 5 名に面接調査を行った。調査期間は、2018 年 11 月～2019 年 3 月であった。

重症化プロセスにおいて、成育歴・教育歴、職場環境、ヘルスリテラシーなどの社会的決定要因、ならびに医療者の能力的要因が大きな影響をもつことが明らかになった。また、重症化予防のための看看連携の課題として、保険者別のアプローチであるため職業生活の特性による生活習慣や地域住民の生活と健診の実態を共有できないこと、地域医療サービスのインフラであるセクター間を超えたネットワークが整備されていないこと、社会的・文化的能力が未開発であることなどの課題が示唆された。

(2) 慢性疾患看護専門看護師による病院と地域をつなぐ血管病の重症化予防推進モデルの開発

前年度の調査より高知県内の血管病重症化予防に関わる保健師と看護師がそれぞれの実践を知らないことが課題となった。そこで、地域・診療所・病院における看看連携に向けて、保健師と病院看護師の活動の現状と課題について共有し議論する場として、前述の①パネルディスカッションを、また佐賀大学と佐賀県が開発した先駆的かつ独自の糖尿病重症化予防プログラムを学び高知県への適用可能性を検討するため、前述の②特別公開講座を開催した。これら①②により、高知県内の血管病重症化の現状、および血管病重症化予防の地域連携システムの必要性について、保健師・看護師の認識を深める機会が得られた。

次の段階として、高知県内の血管病重症化予防に従事する保健師 5 名、看護師（専門看護師 5 名・認定看護師 2 名・看護管理者 2 名）らをレファレンス・グループメンバーとし、看看連携モデルを検討するための会議を 4 回開催した。(1) の事例分析の結果およびレファレンス・グループメンバーそれぞれの現場の状況より、病院内の外来・病棟の看看連携の課題、看護師の社会的決定要因へ対応するための社会的・文化的能力の課題、地域・病院の看護職間の連携がないことによる断片的な看護実践という課題について議論した。これらの議論に沿って、最終会議では院内の重症化予防のためのプログラムを実施する多職種の連携・協働を踏まえた看看連携モデル案を提示し、意見交換を行った。

<小児看護学領域>

1) 赤ちゃん同窓会

開催日時：平成 30 年 10 月 14 日（日）8 時 30 分～16 時 30 分

開催場所：高知医療センター

当日参加人数：看護学部 1・2・4 回生 20 名、看護学研究科博士前期課程 1 名、教員 3 名
内 容：

平成 13 年度より年 1 回、高知医療センターと高知県立大学看護学部の共催で「赤ちゃん同窓会」を開催している。看護学部 1・2・4 回生でベビールームや交流会会場の飾りつけを行い、スタッフや教員の見守る中、子どもたちとベビールームで交流したり、アンパンマン体操を披露したりして、子どもと家族の楽しい時間を演出した。学生は、子どもや家族、スタッフと触れ合う機会を通して、小児看護における看護専門職者としての役割を学ぶ機会を得た。

2) 高知医療センター—高知県立大学包括連携事業

開催日時：第 1 回目：平成 30 年 6 月 22 日（金）17 時 30 分～18 時 30 分

第 2 回目：平成 30 年 8 月 7 日（火）17 時 30 分～18 時 30 分

第 3 回目：平成 30 年 10 月 26 日（金）17 時 30 分～18 時 30 分

第 4 回目：平成 30 年 12 月 20 日（木）17 時 30 分～18 時 30 分

開催場所：高知医療センターすこやか A フロア

参加人数：第 1 回目：10 名（医療センター 7 名、県大 3 名）

第 2 回目：10 名（医療センター 7 名、県大 3 名）

第 3 回目：12 名（医療センター 8 名、県大 4 名）

第 4 回目：8 名（医療センター 5 名、県大 3 名）

内 容：高知医療センターすこやか A フロアと連携し、今年度は「けいれんの子どもへの対応」をテーマに、シミュレーションを用いた勉強会を 4 回実施した。シミュレーション教育は、新人看護師を対象として開催した。看護科長、看護副科長、臨床の指導者、教員とともに、最初に疾患や観察項目、必要な看護について勉強会を行い、その知識や技術を踏まえて高機能シミュレータや人形を用いたシミュレーション教育を実施している。参加者から、シミュレーションを用いてけいれん時の対応を繰り返し実践したことで、実際の臨床場面で落ち着いた対応ができるという評価を得た。来年度は、勉強会の実施回数を増やしながら急変時の対応も含めた実践力の向上とともに、知識の強化ができるよう、シミュレーション教育の継続的な実施を計画していく予定である。

3) 小児看護の魅力を語る会

開催日時：平成 31 年 2 月 20 日（水）15 時～16 時

開催場所：高知県立大学看護学部棟 C313

参加人数：9 名（4 回生 1 名、3 回生 2 名、2 回生 1 名、1 回生 5 名）・教員 1 名

内 容：小児看護の魅力を語る会は、高知医療センターとの包括的連携事業の一環として開催している。最初に小児科病棟で勤務する看護師より、小児看護とはどのようなものか、小児看護の魅力はどういった所にあるのか、看護の実際について話をうかがった。3、4 回生は領域看護実習で、小児看護実習のイメージがつかめていたが、1 回生、2 回生は、話をうかがうことで、小児看護の実際について理解することが出来ていた。将来の看護専門職者としての基盤形成ともなる、重要な会となった。

4) 第2回健康長寿センター公開講座

開催日時：平成30年12月24日 月曜日 13:30～16:30

開催場所：高知県立大学看護学部220教室

参加人数：9名・教員（小児看護学領域4名、健康長寿担当者1名）

内 容：平成30年度第2回健康長寿センター公開講座は、「こどもや家族とともに生活を創造する看護職者が実践する育児支援-継続した質と量を保証した支援を考える-」をテーマに、①こどもや家族と様々な場面で関わりを持つ看護職者が、現代のこどもや家族が抱える課題を共有すること、②病院の助産師、保育園の看護師、保健師など、こどもや家族の生活を支える場は異なっても、これから協働できること、協働したいと考えていることを話し合える場にする、③これからの育児支援について検討することを目的として開催した。

参加者は、県内病院の看護師、地域の保健師、保育園に勤務する看護師・保健師等、こどもや家族と関わりを持つ看護職者であった。今回の公開講座では、現代のこどもが抱える課題について共有した後、各施設で取り組む育児支援、抱える課題について参加者に発表していただき、今後、どのような展望が考えられるかを全員で討議した。

5) 修了生の会

開催日時：平成30年7月21日（土）19:30～22:00

開催場所：（名古屋）和食居酒屋 旬の魚菜 きり山

参加人数：19名（修了生・大学院生・教員）

内 容：名古屋で開催された日本小児看護学会第28回学術集会に合わせて開催した。

修了生の会では、病院、教育機関など、それぞれの勤務先で成果を挙げている取り組みや社会情勢の中で小児看護の課題となっていることなどについての意見交換を行った。それぞれの病院や施設等における取り組みや課題を参加者で共有するとともに、子どもと家族にとっての最善を常に考え、取り組み続けることの重要性やチームでの情報共有のあり方など、多岐にわたる視点での意見交換が行われた。

6) 大学院事例検討会・特別講義

(1) 第1回小児看護学領域事例検討会

日時：5月19日（土）19時40分～22時

参加者：14名（修了生、教員）

修了生を話題提供者に迎え、NICUにおけるケアについて事例を通して検討した。

(2) 第2回小児看護学領域事例検討会

日時：11月11日（日）14時～16時

参加者：13名（修了生、教員）

修了生を話題提供者に迎え、思春期の小児がんの子どものケアについて事例を通して検討した。

(3) 第3回小児看護学領域事例検討会

日時：2月3日（日）13時～15時

参加者：15名（修了生、教員）

修了生を話題提供者に迎え、幼児期の小児がんの子どものケアについて事例を通して検討した。

(4) 小児看護学領域特別講義

講師：濱田米紀氏（兵庫県立こども病院 看護師長 小児看護専門看護師）

日時：2月3日（日）9時～12時

参加者：14名（修了生、教員）

小児看護専門看護師に必要な実践能力や院内の活動に関する講義

<母性・助産看護学領域>

1) 教育・研究活動

(1) 助産看護実習Ⅰの実習施設について

助産看護実習Ⅰはこれまで高知医療センター、高知赤十字病院、幡多けんみん病院、JA高知病院の4施設で実習していたが、今年度から新たに国立高知病院での実習が開始し、計5施設となった。今年度はJA高知病院が分娩制限中であり、4施設で運用した。

(2) 戦略的研究推進プロジェクト

「高知県における精神疾患をもつ女性の妊娠・出産への看護支援モデルの開発」をテーマに、今年度は文献検討および精神疾患をもつ妊産褥婦をケアした経験のある看護職に対してインタビュー調査を行った。

2) 高知医療センターとの包括連携

(1) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース BLSO の支援

本事業は高知医療センターとの包括的連携事業（看護・社会福祉包括的連携事業）である。住居域外で健診・分娩している妊婦が少なくない高知県では、産科を専門とする医療者以外でも分娩に遭遇する機会があり、また、南海トラフ地震を想定した災害医療の病院前救護を目的として、本研修が開催されている。主催は高知県および高知県・市病院企業団立医療センターであり、運営サポートとして母性助産看護学領域の教員および学生が参加している。今年度は2回（9月と2月）の開催を予定していたが、9月は台風のために中止となり、平成31年2月16日（土）に1回のみ開催となった。受講者は、高知県内の救急隊員、医師、看護師など合計18名であった。

3) 地域貢献活動

(1) 平成30年度母性助産看護学領域交流会

本学助産コースの卒業生と教員の交流の目的で、平成30年6月1日（金）に開催した。2名の卒業生と6名の教員が参加した。勤務先での経験や、新たに4月からスタートした大学院の話などの近況に加えて、学生時代の思い出を語り合った。初めて知り合う教員もおり、自己紹介や情報交換をしながら、交流を深めた。

(2) リカレント教育「周産期にみられる症状・兆候を見逃さないアセスメント力を身につけよう！」

本研修会は、日頃「何か変！」と感じた周産期異常の場面で、必要な観察とフィジカルアセスメントが行えるようになることを目標に、卒後1～2年目の看護職者を対象に実施している。昨年度に引き続き、今回は2回目となる。平成30年11月2日（金）に開催し、卒業生を含む県内の産科病棟に勤務する助産師・看護師9名が参加した。

今年度は「呼吸困難」をテーマに、高機能シミュレーターを用いて再現し、フィジカルアセスメントの方法や、チームでの対応を学ぶ機会とした。参加者の感想には「これまで意識してABCDEF評価やSBARをしていなかったことに気がついた」「他施設の方とグループワークしたり、情報共有ができたりしてよかった」などがあり、日頃の実践を振り返り基本に立ち戻ることや、参加者同士の情報交換の場にもなっていた。

＜地域看護学領域＞

1) 高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムによる活動として、高知県健康長寿政策課と協働で取り組んでいる。本年度は、新任期及び中堅期保健師の育成に関する研修の企画・実施の助言と、講師をおこなった。

(1) 新任期保健師育成支援

①集合研修

高知県新任期保健師支援プログラムの一環として、新任期保健師（1～4年目）に対する集合研修を高知県健康政策部長寿政策課と協働で企画し、実施した。

集合研修では、新任期1年目を対象とした「個別支援」、2年目を対象とした「地区診断」、3年目・4年目を対象とした「PDCAサイクル」を行い、講義やグループワーク、個別面談を取り入れた。昨年度より、PDCAサイクルを段階的に理解し活用できることを目的として、3年目研修を導入し、3年目研修を踏まえ、4年目研修では、担当業務の事業体系を整理し、事業の位置づけや計画実施の評価・見直しを行うプログラムを取り入れたことにより、段階を追って講義とグループワークを通して、マネジメントの考え方をを用いて自分の活動を整理し、PDCAで自分の活動を実施していく方策を考えることにつながった。また、参加者が専門職としての力量を習得していくこと、自らの課題に気づき日ごろの実践活動に活かしていくことができるよう支援をおこなった。

管内によっては、それぞれの時期に求められる能力を獲得していくために、研修における課題達成に向けたフォローとして、福祉保健所ごとに行われる研修に、講師として参加し、個別にコンサルテーションを行った。

【1年目研修・個別支援】

第1回新任期保健師研修会（個別支援）

日 時：平成30年8月7日（火）13：30～16：30（参加者：24名）
内 容：講義「地区活動の一環としての家庭訪問を考える」講師：小澤若菜
「事例の解説」・「プロセスレコードの書き方」講師：川本美香
グループワーク 助言者：時長美希、小澤若菜、川本美香、畠山典子

第2回新任期保健師研修会（個別支援）

日 時：平成30年11月8日（木）13：30～16：30（参加者：25名）
内 容：講義「プロセスレコードによる共通の気づき」講師：川本美香
演習「個別支援のプロセスレコード」
面談者：時長美希、小澤若菜、川本美香、畠山典子

【2年目研修・地区診断】

第1回新任期保健師研修会（地区診断）

日 時：平成30年6月15日（金）13：30～16：30（参加者：27名）
内 容：講義「みて、きいて、ありのままの地域を捉えよう」講師：小澤若菜
グループワーク 助言者：時長美希、小澤若菜、川本美香、畠山典子

第2回新任期保健師研修会（地区診断）

日 時：平成30年12月22日（木）13：30～16：30（参加者：25名）
内 容：ポートフォリオの発表・グループワーク
講 師：小澤若菜、川本美香、畠山典子

【3年目研修・PDCA サイクル①】

第1回新任期保健師研修会（PDCA サイクル①）

日 時：平成30年7月26日（木）13：30～16：30（参加者：18名）

内 容：講義「PDCA サイクルとは何か」 講師 小澤若菜

グループワーク

助言者：時長美希、小澤若菜、川本美香、畠山典子

第2回新任期保健師研修会（PDCA サイクル①）

日 時：平成30年12月18日（火）13：30～16：30（参加者：20名）

内 容：PDCA①シートの発表・グループワーク

講 師：小澤若菜、川本美香、畠山典子

【4年目研修・PDCA サイクル②】

第1回新任期保健師研修会（PDCA サイクル②）

日 時：平成30年6月25日（月）13：30～16：30（参加者：15名）

内 容：講義「PDCAにおける評価の視点」講師 時長美希

グループワーク

助言者：時長美希、小澤若菜、川本美香、畠山典子

第2回新任期保健師研修会（PDCA サイクル②）

日 時：平成29年12月18日（月）13：30～16：30（参加者：9名）

内 容：PDCA②シートの発表・グループワーク

講 師：小澤若菜、川本美香、畠山典子

②新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプターや管理者を対象にした研修では、組織管理や人材育成を効果的に実施するための講義をおこなった。また、情報交換をとおり、組織全体で人を育てる意識と、人を育てるために望ましい体制づくりについて検討することで、人材育成に必要な知識と技術が習得できる機会となった。

第1回 平成30年5月8日（火）13：30～16：30（参加者：59名）

前半 講義「『新任保健師支援プログラム』行動目標とは何か」 講師 小澤若菜

後半 講義（プリセプター・管理者対象）、グループワーク（新任者対象）

講義「プリセプターの役割と目標設定について」

講師 時長美希

グループワーク助言者：小澤若菜・川本美香

第2回 平成30年3月14日（木）13：00～15：30（参加者17名）

グループワーク「新任保健師育成計画の評価」について

助言者：時長美希・小澤若菜・川本美香・畠山典子

(2) 中堅期保健師育成支援

高知県の行政機関に所属する中堅期保健師育成支援として、保健活動評価研修を行った。研修は、PDCA サイクルに基づく保健活動全体のマネジメント能力の強化と、地域ケアシステム構築を推進できるよう実施している。この研修では、集合研修（計6回）での講義、演習およびグループワークと、各市町村（3箇所）に出向いたコンサルテーションをおこなった。

① 保健活動評価研修—集合研修—

平成30年5月21日(月)10時～16時 講師：時長美希 受講者：9名

演習「演習で取り上げる活動の位置づけを確認、機能する支援システムについて現状分析・課題抽出を行う、目標を明確にする」

平成30年5月28日(月)10時～16時 講師：時長美希 受講者：9名

グループワーク：目標設定までの全体を通して確認

平成30年6月19日(火)10時～16時 講師：時長美希 受講者：9名

演習「実施計画、評価計画策定」

平成30年6月26日(火)10時～16時 講師：時長美希 受講者：9名

グループワーク「評価計画までの全体をとおして確認」

平成30年11月26日(月)10時～16時 講師：時長美希 受講者：9名

講義「地域ニーズに応じた地域ケアシステムづくり～評価計画を見直し次の方向性をつかむ～」

演習「評価計画の見直しと評価の視点の確認」

平成31年2月18日(月)10時～16時 講師：時長美希 受講者：9名

講義「地域ニーズに応じた地域ケアシステムづくり

—システム・システムづくりの概念、根拠に基づいた地域看護活動—

演習「評価計画の見直しと評価の視点の確認」

② 保健活動評価研修—コンサルテーション及び講義— 時長美希

講義「地域ニーズに応じた地域ケアシステムづくり」(概要版)

平成30年8月28日(火)10時～11時30分 いの町本川支所

平成30年8月29日(水)9時～12時 高知市総合あんしんセンター

平成30年9月19日(水)10時～11時30分 安芸市包括支援センター

(3) 福祉保健所管内新任期保健師研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況について確認をおこなった。また、人材育成の充実を図るため、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言をおこなった。

・中央東福祉保健所 (参加者9名)

平成30年8月31日(金)13:30～16:30 1～4年目保健師

中央東福祉保健所新任期保健師勉強会

講義「地区診断・PDCAサイクルの要点—普段の気づきを活かした展開—」および課題に関する個別面談 : 川本美香

・中央西福祉保健所 (参加者9名)

平成30年8月20日(月)9:30～12:30 1～4年目保健師

中央西管内新任期保健師研修会

講義「普段の気づきを活かした展開—新任期保健師研修の課題を活用して—」および課題に関する個別面談、情報交換による交流 : 川本美香

・須崎福祉保健所

平成 30 年 9 月 7 日（金）13:00～16:00（参加者 9 名）

・須崎福祉保健所管内プリセプター研修会「ポートフォリオ作成支援研修会」

平成 30 年 11 月 9 日（金）13:00～16:00 1～4 年目保健師（参加者 9 名）

・須崎福祉保健所管内 2 年目フォロー研修会：講師 畠山 典子

・須崎福祉保健所管内市町村事業報告・新任期保健師研修会個別指導：助言者 畠山 典子
講義「保健師のキャリア形成」：講師 畠山 典子

・幡多福祉保健所

平成 30 年 10 月 29 日（月）13:00～16:00（参加者 13 名）

2・3 年目を対象とした、集合研修の課題に関する発表 グループワークの助言者
：小澤若菜

2) 地域保健活動支援

高知県健康長寿政策部健康長寿政策課、高知県健康政策部健康対策課・福祉保健所地域支援室と協働し、各管内の地域保健活動の取り組みに関する研修会の講師や助言を行った。また、市町村が取り組む保健活動や事業計画への参画、助言を行った。福祉保健所の地域保健活動報告会では、市町村の様々な事業や保健活動に関する報告を通して、参加者同士、活発な意見交換や質疑応答がなされた。報告会での助言を通して、参加者が、保健活動の評価の視点や方法を学び、より効果的な実践を目指す機会となった。活動状況は以下の通り。

(1) 高知県

①福祉保健所での取り組み

・幡多福祉保健所

平成 30 年 9 月 10 日（月）13:00～16:00（6 市町村, 1 医療機関, 1 福祉保健所：参加者 21 名）

平成 30 年度幡多福祉保健所管内母子保健指導者研修会

講義「産前産後の切れ目ない支援について」、事例検討会 講師 畠山 典子

・須崎福祉保健所

平成 31 年 1 月 21 日（月）13:30～16:00（参加者 53 名）

平成 30 年度須崎福祉保健所管内保健福祉活動報告会：講師、助言者 時長美希

・安芸福祉保健所

平成 31 年 2 月 28 日（木）13:30～16:45（参加者 25 名）

平成 30 年度安芸福祉保健所管内保健福祉活動報告会：講師、助言者 川本美香

・中央西福祉保健所

平成 31 年 3 月 4 日（月）13:30～16:00（参加者 46 名）

平成 30 年度中央西福祉保健所管内市町村保健福祉関係職員研修会

：助言者 時長美希・川本美香

②平成 30 年度特定保健指導従事者育成研修会

平成 30 年 8 月 22 日（水）10:30～12:00（参加者 57 名）

保健指導の質の評価～効果的な保健指導を行うために～：講師 小澤若菜

③高知県のネウボラ推進の取り組み

高知県で策定している「日本一の健康長寿構想 第3期構想 Ver. 3」大目標Ⅲ厳しい環境にある子どもたちへの支援、大目標Ⅳ少子化対策の抜本強化において、「高知版ネウボラ」の推進が掲げられている。その取り組みとして、県主催の中央研修（県内市町村・福祉保健所母子保健担当者向け研修）を実施した。

- ・平成30年5月30日（水） 13:30～16:30（参加 13市町村、5福祉保健所 計33名）
高知県母子保健コーディネーター（初任者）研修会：講師 畠山 典子
- ・平成31年2月22日（金） 10:00～16:00（参加 24市町村、5福祉保健所 計45名）
高知県母子保健コーディネーター（現任者）研修会：講師 畠山 典子
「子育て世代包括支援センター及び母子保健コーディネーター・保健師の役割について」
- ・平成30年7月25日（水）10:00～16:00（参加：17市町村28名、5福祉保健所8名 計36名）
子育て世代包括支援センター連絡調整会議：畠山 典子
- ・平成30年6月13日（水）10:00～16:00（参加 25市町村、5福祉保健所 計52名）
「総合相談窓口機能強化のためのスキルアップ研修会（前期）」：言者：畠山 典子
- ・平成30年12月17日（月）10:00～16:00（参加 22市町村、5福祉保健所 計46名）
「相談窓口機能強化のためのスキルアップ研修会（後期）」：助言者：畠山 典子
内容：事例検討を実践しての気づき（圏域ごと）
事例検討（小グループ）
継続した取り組みにしていくための検討

(2)市町村

①ネウボラ推進会議への参画（高知市・いの町）

平成30年度より高知市・いの町の2市が高知県内モデル市町となり、高知県のネウボラ推進に係る協議会を設置した。市・県及び、大学（アドバイザー）で、ワーキングを行い、それぞれの市町に応じた目指す姿や今後の施策方針を検討した。

今年度の協議会メンバーの所属は以下の通り。

【高知市】母子保健課，子ども育成課，保育幼稚園課

【いの町】ほけん福祉課，教育委員会，吾北総合支所福祉課，枝川保育園，枝川幼稚園，
地域子育て支援センター

【高知県】健康政策部健康対策課周産期・母子保健推進室，地域福祉部児童家庭課，教育委員会事務局幼保支援課，中央西福祉保健所健康障害課

【アドバイザー】高知県立大学看護学部 准教授 嶋岡暢希，助教 畠山典子

〔開催日程〕

- ・平成30年8月22日（水） 10:00～12:00（25名）
第1回 高知市ネウボラ推進会議：アドバイザー
講演「ネウボラ」とは ～切れ目ない支援を目指して～：講師 畠山 典子
- ・平成31年2月18日（月） 10:00～12:00（25名）
第2回 高知市ネウボラ推進会議：アドバイザー
- ・平成30年6月22日（金）14:00～16:50（25名）
第1回 いの町ネウボラ推進会議：アドバイザー 畠山 典子・嶋岡暢希
講演「ネウボラとは」：講師 畠山 典子

- ・平成 30 年 11 月 26 日（月） 10:30～12:00
 いの町ネウボラ推進に係るコンサルテーション：畠山 典子・嶋岡暢希
 参加者：いの町保健師 3 名、高知県中央西福祉保健所保健師 2 名、
 高知県健康対策課保健師 1 名
- ・平成 30 年 12 月 27 日（木） 13:30～15:30 （24 名）
 第 2 回 いの町ネウボラ推進会議 ：アドバイザー
- ・平成 31 年 2 月 13 日（水） 14:00～16:00（27 名）
 第 3 回 いの町ネウボラ推進会議 ：アドバイザー
 - ・これまでの取り組み経過について
 - ・いの町版「ネウボラ」～妊娠期から子育て期まで切れ目のない支援体制～について
 - ・いの町における「ネウボラ」の推進体制と今後の取り組み
 - ・高知県版ネウボラの推進について

②土佐清水市子育て世代包括支援連携協議会

母子保健、地域の保健医療又は福祉に関する機関との連携により、母子保健に係る問題の早期発見及び防止に努める。また、関係機関による情報交換や調整を行い、問題意識及び情報の共有化を図り、母子保健の向上を目指すため土佐清水市子育て世代包括支援連絡協議会を設置した。本協議会のアドバイザー及び以下の研修企画講師として参画した。

- ・平成 30 年 8 月 2 日（木） 14：30～16:30 （参加者 17 名）
 土佐清水市子育て世代包括支援連絡協議会 アドバイザー・講師：畠山典子
 講義「子育て世代包括支援センター～切れ目ない支援を目指して～」
- ・平成 30 年 8 月 3 日（金） 9:00～11:30 （参加者 16 名）
 土佐清水市個別検討会議 アドバイザー 畠山 典子
 - ・子育て世代包括支援センターの運営について
 - ・個別ケース検討会
- ・平成 30 年 9 月 19 日（水） 14:00～15:30 （参加者 18 名）
 土佐清水市子育て包括支援センター啓発事業
 「子育て支援講演会」： 講師 畠山 典子
- ・平成 30 年 9 月 20 日（木） 9:00～11:30
 土佐清水市個別検討会議 9:00～11:30 （参加者 14 名）
 講義「産後ケアとは」：講師 畠山 典子
 意見交換会

③高知市産後ケア事業検討会

平成 30 年度より開始した「宿泊型産後ケア事業」についての現状と課題を話し合い、高知市産後ケア事業の質の向上を目指した。

平成 30 年 7 月 20 日（金） 15:00～17:00 助言者：小澤若菜・畠山典子

3)高知市保健師人材育成ガイドライン策定委員会

平成 30 年 7 月 20 日 13 時 30 分～15 時 30 分

平成 30 年 9 月 27 日 10 時～12 時

平成 30 年 11 月 30 日 14 時～16 時高知市たかじょう庁舎

平成 31 年 2 月 1 日高知市総合あんしんセンター

4)高知県保健師人材育成評価検討会

高知県では、保健師人材育成ガイドラインに基づいた、各期の支援プログラムの実施や、自治体での人材育成計画を行っている。今年度は、高知県保健師人材育成ガイドラインの改定を行うため、高知県、高知市、保健市長会、市町村衛生協、看護協会の代表者と共に協議を行い作成した。新任期保健師人材育成プログラムについては、ワーキンググループを立ち上げ、研修成果の評価を行うことで、新任期保健師の求められる能力の改変に取り組んだ。

第1回 平成30年6月1日(金) 第2回 平成30年10月15日(月)

第3回 平成30年12月25日(火) 第4回 平成31年2月1日(金)

5)保健師交流大会の開催

平成26年より開始した本大会は、今年で第6回を迎える。大会の趣旨は高知県内の保健師が専門職者としての自己研鑽の機会を得ることで、今後の実践活動に活かしていくとともに、相互交流をとoshi保健師間のエンパワメントを図ることである。「保健師の仲間で悩みや不安を語りあい、エンパワメントされること」、「高知県の保健師の歴史を振り返り、高知県で働く保健師の良さを継承すること」、「保健師の専門性を再確認し、自分たちの今後の保健活動にいかしていくこと」を3つの柱に継続している。4月に実行委員会を立ち上げ、市町村衛生職員協議会、職能団体、教育機関、高知市、高知県の保健師が企画・運営を行った。

今年度は「災害支援」をテーマに、平成30年7月豪雨における高知県内での被災状況や災害時保健師活動の実際、岡山県への保健活動チーム派遣支援の実際の体験を話題提供者3名にお話しいただき、ワールドカフェの手法を用いたグループワーク、全体共有を行い、保健師が日々感じている課題や、この度経験した災害時保健活動事例に基づく課題提起、解決策の提案、具体的なイメージ化等、保健師活動年数や所属別は問わず県内自治体保健師がさまざまな視点から語り合う機会となった。

日 時：平成30年1月26日(土) 13:30~16:00 (参加者 64名)

場 所：高知県立大学池キャンパス 共用棟 B1F 食堂ホール

6)高知県立大学研究戦略プロジェクト推進の取り組み

高知県と協働で取り組む人材育成ガイドラインの改定にあたり、平成30年度戦略的研究推進プログラムの採択を受け、研究課題として取り組んだ。

「高知県の現任教育における新任期保健師支援プログラムの再構築」(研究代表者 時長美希)

7) 学生のボランティア支援の取り組み

①高知市保健所健康増進課「高知市いきいき健康チャレンジ2018」

1回生から4回生の学生延べ20名(内3名は社会福祉学部)が参加し、高知市民の方々の健康づくりのサポートに取り組んだ。この事業は、高知市の早期からの健康な生活習慣づくりを目指して、高知市民200名程度が参加するものである。参加した学生は運営サポートを行う中で、市民の方々や保健師等専門職の皆様とも交流し、住民の生活習慣病予防の取り組みや健康づくりに関する意識を高めるきっかけとなる取り組みを体験した。また、本事業を通じて多職種連携や、住民の健康づくり対策等についても学ぶ機会となった。

日時：平成30年6月10日(日)、平成31年2月3日(日) 9:00~13:00 場所：高知市保健所
ボランティア支援：畠山典子

②高知市一宮トーメン団地自治会「第5回桜まつり（桜ウォークラリー）」

高知市一宮トーメン団地自治会で開催される「第5回桜祭り（桜ウォークラリー）」において、学生がボランティアとして、団地の活性化に取り組むお祭りへ参加させていただき、運営協力を行った。このお祭りは、平成31年3月31日（日）に行われ、17名の学生が参加した。学生は、事前の打ち合わせから参加した。各自の役割を果たし、またそれ以上に地域の方との交流をとおり、地域が持つ力を感じることができた。参加した学生は「みんなで大きな声を出して、祭りを盛り上げることに協力できてうれしい」、「地域の方が行う地域づくりの実際にかかわらせていただき、将来に役立つと思った」というように、地域の手作りのお祭りにボランティアとして参加することで、地域の方みんなでやる地域づくりをそれぞれに感じとっていた。

日 時：平成31年3月31日（日）8:00～12:30

場 所：高知市一宮トーメン団地1号・2号公園

ボランティア支援：川本美香

8) 高知県看護協会保健師職能委員の活動

高知県内の保健師職能委員と共に、保健師のネットワークの強化や、人材育成に関する課題解決、地域包括ケアの構築に向けた役割の明確化を図るため、さまざまな組織の委員と共に活動し、事業運営や研修の企画を行っている。

今年度は、助産師職能との合同事例検討会や、保健指導ミーティング及びファシリテーション研修会等を委員活動として取り組んだ。合同事例検討会では、高知県の「生きる力」の現状と課題を共有し、それぞれの職能として出来る取り組みを明らかにした。今後も、保健師活動の充実を図るために継続した活動を行っていく。

9) 平成30年度全国保健師教育機関協議会中国・四国ブロックの活動

中国・四国ブロック定期会議・研究会

目 的：保健師教育機関相互の連携を密にして、保健師教育に関する研究・協議を行い、日常の教育活動に活かし、その向上発展を図る。

日 時：平成30年9月22日（土） 10時00分～16時 岡山

平成30年度全国保健師教育機関協議会の活動報告

研究会テーマ：カリキュラム改正に向けて 参加者：時長美希 小澤若菜

四国ブロック研究会

目 的：保健師教育の現状と課題を共有し、四国地区の教員の交流を図る

日 時：平成31年2月8日（金）12:30～14:00 高松

テーマ：災害時保健活動～7月豪雨水害の実態から～

健康危機管理に関する保健師教育について情報交換 参加者：時長美希

＜在宅看護学領域＞

1)ケア検討会

在宅看護ケアの質向上、在宅看護のネットワーク作りを目指し、看護学部看護相談室事業として、在宅看護領域ケア検討会を今年度は3回実施した。

第1回は、「腎臓がんによる転移性大腿骨病的骨折の患者の在宅移行支援」をテーマに事例検討を行った。家族背景を知り、患者・家族にとっての希望や目標を明らかにすること、多職種である医師をうまく活用し退院に向けて前向きな意思決定を促していくことの重要性について話し合った。また、事例検討会を進める中で、腎臓がんや分子標的薬など疾患や治療の理解を行い、ケアに繋がる学びもできた。(参加者12名)

第2回は、「入退院を繰り返す高齢患者の退院支援」をテーマに、事例検討を行った。透析が必要な独居の高齢患者事例について、受診時に内服管理ができていないことが発覚した後、多職種を含めて内服を簡素化し、サービス利用することで内服が徹底できるように再調整を行った患者さんに対し、患者さんのこれまでの生活や家族背景を振り返り、「その人らしく、在宅で生活するためには、いっどこで、どの職種とどのように情報共有したらよかったのか」について話し合った。(参加者17名)

第3回は、「今回は、「治療に消極的な利用者への支援」をテーマに。事例検討を行った。外科的手術が必要な状況であるが、術後に足腰が弱くなることへの恐怖から、手術治療に対して消極的になっている利用者へのアプローチ方法について話し合った。(参加者6名)

訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師の方々だけでなく、第1回は高知県内の病院に勤務する在宅看護専門看護師の方々、第2回は病院の看護師の方々、社会福祉士や理学療法士と、病院や地域で働く他職種も参加したケア検討会となった。第3回は、高知県中山間地域等訪問看護師育成講座、新卒訪問看護師育成の修了者が事例提供してくださり、訪問看護師としての成長も感じる事が出来たケア検討会となった。このように、縦や横のつながりを強める場となっている。

2)その他の健康長寿センター事業の展開

上記事業以外に、以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告は、第1部「9.健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

(1)地域医療介護総合確保基金事業

- ①中山間地域等訪問看護師育成講座
- ②退院支援事業
- ③高知県介護職員喀痰吸引等研修

(2)土佐市連携事業：土佐市地域ケア会議推進プロジェクト

3)中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築への支援

中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築に向け、以下の会議等にアドバイザー等として参画し、支援を行なった。

- (1)公立病院連絡会
- (2)地域連携室連絡会
- (3)土佐市地域包括ケア意見交換会

<看護管理学領域>

1) ケア検討会

平成30年度は、これまでのアンケート調査の結果も踏まえながら、事例を提供して頂いた施設と相談して、3回のケア検討会を企画・実施した。ケア検討会では、臨床の看護部長、看護師長、看護師、教員、院生が参加し、情報を共有し、類似した状況、問題に対する異なる見方、解決のためのアイデアについて、活発に意見を交換した。参加者は、事例に基づいた現象の多面的な理解、解決への手掛かりを見出すことができた。

(1)第1回ケア検討会

「データを活用して看護管理を『見える化』しよう」というタイトルで話題提供が行われ、看護管理の見える化の一つであるデータとの付き合い方、データマネジメントについて意見交換を行った。看護管理者や看護師、看護管理領域の教員ら33名が参加した。データや情報とは何なのか、データとどのようにつきあっていくのかについて、率直な意見交換をし、看護管理者としてのデータの捉え方や取り組みについてディスカッションを行った。

話題提供者からは、看護管理をナラティブに伝えるにはどうすればよいか、臨床推論をどう捉えるかという疑問から、データを「見える化」することに着目した事例が紹介された。時間外勤務という事実に対して、問題の背景（仮説）を検証し、データ収集、データ分析を行い、スタッフに「見える化」して業務改善、時間外勤務削減に繋がった事例であった。その後、データマネジメントには何が必要なのかについて参加者とともに議論し、探求したいことが伝えられた。参加者からは、人員配置について部署間の差や業務の多忙さをデータ化して関係者に伝えることができていない、看護必要度の適正化に向けて取り組んでいるが、成果やスタッフのモチベーションにつながっていないなどデータを活用した看護管理の課題や困難感について意見が出された。また、データへの捉え方については、組織の捉え方や視野の違いがその根底にあるのではないかと問題提起がされ、データを一緒に見て情報としてどのように捉えるか、データをともに解釈していくことが重要であり、実際に取り組んでいることが紹介された。

また、データマネジメントの一例として、該当する部署にビジョンとともに、取り扱わないといけない情報を提示して、何をしてほしいのかをしっかりと伝えて、スタッフたちの意思決定に委ねる取り組みが紹介された。データの可視化や看護必要度を評価する目的は何かをしっかりと捉えること、看護の質の可視化と質の向上へ繋げる重要性について確認された。また、情報提供として、データサイエンスに関する政策的動向、データリテラシー（データの活用能力）の内容、社会人が活用できるデータ活用能力向上のためのツールが紹介された。話題提供者からは、臨床研究を行う場合は大学と連携すること、臨床家である看護管理者は、自分の組織がどうありたいかビジョンをもって、マネジメントにデータを活かすことが重要であるというまとめが行われ、閉会した。

(2)第2回ケア検討会

第1回の「データを活用して看護管理を『見える化』する」というテーマに引き続き、具体的に活用するための事例検討として、労働と看護の質向上のためのデータベース（DiNQL）事業とリンクした話題提供に基づき検討会を行った。看護管理者や看護師、看護管理領域の教員ら20名が参加した。

話題提供者から、地域包括ケア病棟を増床後に、誤嚥性肺炎の患者が増加したことから、誤嚥性肺炎の対策チームを編成し、チーム医療で取り組んだ結果、誤嚥性肺炎の発生の減少につながった事例の報告がなされた。誤嚥性肺炎を起こさないための対策として、現状を把握したうえで、誤嚥性肺炎に関連する状況として看護補助者との協働や他職種との連携、認知症高齢

者ランクⅢ以上、退院在宅復帰率、医療者の時間外労働や看護必要度など様々なデータを可視化してベンチマークを活用し、自部署の状況や特徴を知ることや、他病院との評価をすることで、看護の質の向上につなげている内容であった。また、ベンチマークを活用することで、今までと異なる視点で看護の質の評価を可視化しており、大変興味深い内容であった。

参加者から、どうすれば数値化することができるのか、管理者は何のためにデータを比較するのか、管理で活用できることは何か、ベンチマーク評価をどのように活用できるのか、データ収集した管理者はどのように動くのかなどの意見が出された。また、数値化するだけでなく、この項目の数値が変化するとこうなるのではないかと仮定するなど、自らが意識して数値を扱い可視化できることが、アウトカムとして看護の質につながることや、問題・課題意識をもって管理していくことが重要であることなどの意見や感想が出された。

話題提供者からは、誤嚥性肺炎の患者の増加に対して、何が起きているのか最初はわからなかったが、何かできることはないか、現場の状況を把握するために多職種によるカンファレンスを行い、誤嚥性肺炎の対策を考えていった。患者のより良いアウトカムに繋げるためにチームとして協働して取り組んだ成果であるというまとめが行われ、本会は閉会した。

(3)第3回ケア検討会

第1回、第2回の「データを活用して看護管理を『見える化』する」というテーマに引き続き、具体的に活用するための事例検討として、中央手術センター看護管理者の役割-効率性と安全性に視点をおいて手術環境を調整する-という事例テーマに基づき検討会を行った。看護管理者や看護師、看護管理領域の教員ら15名が参加した。

話題提供者からは、患者さんと医療者に安全な手術医療の場の提供を考慮しながら、病院経営への貢献利益が高い手術室の効率性の「カイゼン」につながった事例の報告がなされた。

手術室の稼働率を改善するために、看護管理者として、手術物品の準備業務を改善することによって手術と手術との合間の時間を短縮することと診療材料費抑制などの対策を行ったことが述べられた。具体的内容としては、手術物品準備に関わる無駄な作業の見直し、消費の可能性が少ない診療材料の見直しなどが述べられた。データ活用の実際としては、院内データ管理システム上のデータと委託業者からの様々なデータを可視化して、自部署の状況や各診療科の診療材料の特徴を知ることを行った。そして、現状を把握した上で、手術室看護師、各診療科医師、業務課、委託業者との交渉や連携を進めた。その結果、手術室看護業務効率性の改善だけでなく職員の安楽、診療材料費の抑制、廃棄処理削減による環境への配慮、委託業者とのwin-winな関係の構築などにつながったことが報告された。

参加者からは、医療関係者や事務職などの他職種との交渉の際のデータの見せ方に関する質問や、客観性の高いデータを活用したことにより「カイゼン」を実践する上で、より周囲を巻き込むことができたのではないかという意見、事例を参考に自施設での取り組みができるかもしれないという意見が出された。また、データの捉え方とデータ活用に対する態度については、組織風土やデータが使用できる環境、データ利用のアイデアの共有の機会、データを活用できる人材の存在がその根底にあるのではないかという課題を深める意見交換がなされた。

話題提供者からは、管理は創造性と想像性を大切にするという意識をもって、看護管理者の視点として、無駄の排除、エコロジー対策、効率性と職員の安楽、メリハリのあるコスト、院外関係者との良好な関係性などが重要であるというまとめが行われ、閉会した。

2) リカレント教育

平成30年11月3日(土)、高知市にて、高知大学医学部附属病院教育担当師長 谷めぐみ氏(平成28年度博士前期課程修了)を招いて、「中堅看護師の成長支援に関する研究 ―中堅看護師の成長を促進する支援者のかかわり―」の講演を頂いた。博士前期課程および後期課程の修了生、在學生、来年度の入學生、教員を含め高知県内から17名の参加があった。研究の背景、目的、研究の枠組みや研究方法などを説明したのち、分析方法、とくに研究上の因子分析の位置づけや選択した因子抽出方法と回転方法の選択の理由、さらに重回帰分析の方法の選択について、研究仮説を大切にするのか、あるいは収集したデータの挙動を大切にするのかなどの議論がされた。研究結果として、中堅看護師の成長を促進する支援者の効果的なかかわりには、支援者が自身のプライベートと仕事の両立の工夫や看護観を語るかかわりと支援者が中堅看護師の反応を捉えるようなかかわりがあることが明らかとなった。この研究の分析方法に関して、参加者とともに、研究手法の時代背景も含めた活発な意見交換が行われた。

3) 交流会

平成30年11月3日(土)に高知市内にて交流会を実施し、博士前期課程および博士後期課程の修了生、在學生、入学予定者、教員を含め17名が参加した。交流会は、美味しい食事を頂きながら、参加者が自己紹介を行い、現況や看護管理への思いを語り合った。看護管理に関わる者として、今後目指す取組や課題などの意見交換が行われた。初めて参加する修了生にとっては、看護管理や研究について同志と意見交換することができ、現場で研究を行う必要性や研究の楽しさを再認識する機会となった。修士1回生と2回生にとっては、修了生に今の悩みを相談してアドバイスをもらったり、次年度から修士課程に進学する者にとっても、入学後について情報を得る貴重な機会となった。修了生から新入学生まで、交流会によって親睦を深めることができた。

4) 抄読会

大学院看護学研究科の看護管理学を専攻している博士前期課程の学生と看護管理学の教員が参加して、研究論文の抄読会を週に1回実施している。平成30年度も、4月から開始し、8月と3月は休みとし、その他の月は毎週実施した。プレゼンターは大学院学生が担当し、研究のレビューとクリティーク、実践への活用について活発に討議している。

5) 課題と評価

看護管理学領域では、年に3回のケア検討会を企画することを目標にしているが、今年度もこれを達成することができた。また、高知県下の看護管理の学際的ネットワークを構築・維持すること、およびケア検討会での議論の深まりも考慮して、毎回20名程度の参加を目指しているが、これも達成することができた。リカレント教育・交流会も県外の修了生が集まるなど、着実に修了生のネットワークが構築されて来ているものと思われる。看護管理学領域の抄読会も毎年継続できており、大学院生とともに研究と実践とのリンケージを探求することができている。しかし、平成30年度は、博士後期課程の学生が在籍していなかったこともあり、修士の学生だけのディスカッションとなり、より深く広い議論の必要性を感じた。次年度は、後期課程の学生の入学も予定されているので、更に活発なアカデミックな議論を期待している。

<老人看護学領域>

平成 30 年度、老人看護学領域では看護相談室の活動としてケア検討会を実施した。

1) ケア検討会

現場での事例をもとに、病院・施設で働く看護職の方々と事例検討を行った。高齢者への理解を深め、様々な観点からケアの方略を探れるように企画し、年 2 回実施した。

(1) 第 1 回老人看護学領域ケア検討会

テーマ：「入院している高齢者の意思決定・意思尊重とは」

【日 時】平成 30 年 6 月 12 日（火）18：30～20：40

【場 所】看護学部棟 2 階 C209

【参加者】8 名

今年度 1 回目のケア検討会は、3 つの事例について意見交換を行った。1 つ目の事例は、強度の難聴がある肺がん患者の男性で、新たな化学療法を行うか否かの選択について検討した。参加者からは、強度の難聴があるので、本人が医師の説明をどのように理解しているのかは、口頭説明だけではなく筆談なども交えて、時間をかけて確認した方が良いのではないかと、本人が喫茶店に通う目的を大事にしたい、副作用の対策も進んでいるので、その情報も伝えたい、家族の負担はどの程度になるか、などの意見が出た。

2 つ目の事例は、慢性閉塞性肺疾患の男性が、急性増悪で CO₂ナルコーススにより意識が多少混濁し、非侵襲的陽圧換気（NPPV）を導入することで救命が可能と考えられる事例であった。しかしこの患者は、2 年前に事前意思表示として「人工呼吸器や胃瘻はしたくない」と書き残しており、一概に NPPV の導入ができない状況であった。患者本人が治療を決定することは基本であるが、本人の拒否を理由に、初めから治療をしないのではなく、医療従事者は最善と思われる治療をその都度提案し、よく話し合っていくことが大切であることを再認識した。

3 つ目の事例は、誤嚥を繰り返すようになった身寄りのいない認知症を抱える高齢者（自治体からの成年後見人は存在する）の、胃瘻導入の選択について検討した。自治体が委託する成年後見人は医療従事者ではないため、やはり生死に関わる医療の選択まではできないことを共有した。その場合は後見人を含め、本人に関わる支援者が集まり、元気なころの本人の生きざまやその人らしさ等を尊重するような、本人にとっての最善を話し合い、本人にとって望ましいことを基本として、関わる全員が責任を負う形で決定することが必要であることを共有した。

これら 3 事例を通して、エンド・オブ・ライフ・ケアにかかわる意思決定のためにも、これからはいわゆるアドバンス・ケア・プランニングが重要であること、またそれは、ご本人が元気なうちから考え、意思決定できるよう看護職があらゆる選択肢を提供し、ともに伴走する姿勢が重要であることを学んだ。



(2)第2回老人看護学領域ケア検討会

テーマ：「急性期病院における認知症高齢者のケア」

【日 時】平成30年10月9日（火）18：40～20：30

【場 所】看護学部棟2階 C209

【参加者】17名

第2回目ケア検討会は、13名の参加者を迎え、日本看護倫理学会が公開している「医療や看護を受ける高齢者の尊厳を守るためのガイドライン」の事例を用いて、「日々のケアのなかで同じような声掛けを行っていないだろうか」「普段、病棟ではどのような対応を行っているか」など、日々の実践と照らし合わせディスカッションを行った。

導入部分では、高齢者の尊厳を守るかかわりができていない時の状況を振り返り、高齢者と医療者の状況や、その状況におけるそれぞれの思いや考え、周囲の環境など様々な角度から検討し、同じような場面に遭遇した時、普段どのように対応しているか、意見を出し合い共有した。

また、「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明2016をもとに、認知症高齢者の医療・ケアに携わる看護職の関わりが、認知症高齢者と家族の安心やケアの質を担保する上で重要である事を再確認した。

参加者からは、「普段ジレンマを感じていることを話し合うことができた」「高齢者に対する看護の本質を考える機会となった」「病院によって対応の違いが勉強になった」「他の病院・施設での対応方法を聞いて勉強になった」などの意見も聞かれた。

次年度も、参加者のニーズを取り入れたケア検討会を企画し、日頃の高齢者ケアの振り返りや施設間の意見交換の場に繋がることを目指していきたい。



<急性期看護学領域>

1) 社会貢献活動について

(1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質的向上を図ることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。

第1回目は、「クリティカルケアにおける意思決定」と題し、救急外来での意思決定場面について話し合い共有した。患者の療養のプロセス中での意思決定、情報が少なく、状態も悪化している場面での意思決定について参加者で検討し、リソースナースの活用や受診病院がかかりつけ医の場合の患者の状態が分かるような仕組み、家族への関わりなど積極的に意見が出された。医療者側の思い、患者・家族側の思いについて様々な意見の共有ができた。参加者は14名であった。

第2回目は、「患者をイメージする力」と題し、集中治療室における患者の思いを尊重しながら治療を進めていく上での困難について話し合い共有した。生死のはざまにある患者にとって、真の希望は何なのか、その時に訴えていることは患者の本来の希望なのかどうか、家族はどう思っているのか、患者と家族間での急変時の対応についての意思統一はどうかなどの視点で積極的な意見が出された。状態悪化時の対応については臨床でも様々な困難があり、患者の真のニーズをくみ取ることの重要性も再確認できた。参加者は17名であった。

(2) リカレント教育

洛和会音羽病院の大野博司先生をお招きし、「重症患者の循環動態」と題して、特別講義を開催した。第1部では、重症患者における循環動態と輸液管理などについて基礎的な内容から講義していただき、循環管理についての学びを深めた。第2部では、大学院修士による事例発表および事例検討を実施した。臨床の場での看護と治療の双方を効果的に実施していくためにどのように考えるとよいか、大野先生からのアドバイスもうけ、深めることができた。参加者は17名であった。

(3) 高知医療センターとの包括的連携事業

次の3つの事業を展開した。

①HCUにおける認知症高齢者への看護ケア

1年間を通して認知症高齢者への看護について学習会と事例検討会を実施した。近年、認知症高齢者の入院も増加しており、その対応に苦慮している。看護として認知症症状の増悪なく治療、療養を継続していただくことが可能となるような介入についてHCUでは課題として挙げられていた。そこで、先方との連携を図り、まずは老年看護学教授竹崎久美子先生より、認知症についての研修を実施し、参加者は8名であった。現在のケアを振り返るため、第1回事例検討会では10名の参加者とともにディスカッションし、ケアの方向性などについて話し合った。さらに第2回事例検討会では2事例の事例紹介があり、参加者11名とともに看護の振り返りや患者にとって効果的であった、あるいは何かのきっかけになった出来事を振り返り看護の方向性について話し合った。

②5Bフロアの新人看護師のシミュレーション学習会支援

第1回目は、新人看護師が大腸切除術後患者の縫合不全の観察、アセスメント、報告ができることを目的とし、実施した。参加者は9名であった。第2回目は新人看護師が臍頭十二指腸切除術後の縫合不全の観察、アセスメント、報告ができることを目的とし、実施した。第

1回目、2回目ともに模擬患者に対して新人看護師が実際に観察を行い、それを指導者に報告する、指導者・教員からのフィードバックを行うという形で進めた。第1回目では報告後のリフレクションについて、良くない例を教員2名で提示し、その理解を深めた。第2回目では病棟管理者と相談し、第1回に比較して難易度の高い症例の設定とし、新人の成長の実感の機会とした。2回のシミュレーション教育を通して、新人看護師は1年間での成長を実感でき、また指導者は日々の指導の成果を実感することができたという感想であった。

③ICUにおけるせん妄ケア

川崎医療福祉大学より急性・重症患者看護専門看護師でもある古賀雄二先生をお招きして、「PADISガイドラインにおける非薬理ケア」についての講義を開催した。日常の看護ケアの中での介入方法や実際に介入することの意義、非薬理ケアの重要性について理解を深めることができた。患者の個別性や日常生活の構築を行いながらせん妄ケアを行うためにはABCDEFバンドルにもものとりながら、患者のニーズをアセスメントし、介入後の反応をくみ取っていくことの必要性を理解する機会となった。参加者は12名であった。

2) 研究活動について

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。平成28年度から3年間の計画で「家族の体験を基盤としたクリティカルケアにおける悲嘆ケアガイドラインの開発」（研究代表者：大川宣容）、平成29年度から3年間の計画で「地方都市でのクリティカルケア看護熟達者の発展的相互学習システムの構築」（研究代表者：井上正隆）、平成29年度から4年間の計画で「トランジションを基盤としたICU新人看護師の看護実践能力向上支援プログラムの開発」（研究代表者：田中雅美）、平成30年度から3年間の計画で「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）の研究に取り組み、研究成果の公表を目指している。

また、大学院修了生の学会発表支援を行い、平成30年度には日本クリティカルケア看護学会にて修了生1名が発表を行った。また、大学院生の修士論文としては「ICUにおけるNPPV装置患者の調整行動」、「心臓手術を受けた患者の情報探索行動」、学部生の看護研究としては「バーチャルリアリティ技術を用いた模擬的手術室訪問の有用性検証のための基礎研究」について取り組み、平成31年度に学会発表できるよう支援を続ける。

3) その他

平成30年度にクリティカルケア看護学領域CNSコース2名の大学院修了生を輩出した。また、1名が急性・重症患者看護専門看護師の資格を取得した。